

# 傷口がゆっくりふさがる日が来ることを信じて

## —ある避難者の思い—

福島第一原発（1F）が爆発した時、私たち家族\_私、夫、子（6歳、3歳、9か月）は、6年前にIターンで移り住んだ福島県矢祭町の借家（1Fから80km）でささやかな田舎暮らしをしていました。そして、福島県内に永住したいと思うようになっていたから、家族の夢でもあった家付きの素敵な土地をいわき市の山間に見つけて、爆発が起きる2か月前の1月には契約手続きを済ませ、4月から新天地（1Fから34km）暮らしを始めるための引っ越し作業を進めている最中のことでした。

3月14日の夜、私たちは行き場を失ったような思いで、福島（矢祭町）を後にしました。新天地（いわき市）への希望を打ち砕かれ、夢も希望も失い、宙ぶらりんのまま暮らしているような思いは、いまもつづいています。世界中で見られる“難民”のような状態でしょうか。どこが自分たちの本当の居場所なのか、何を信じればいいのか…。あのような大惨事が起こり、福島だけでも16万人以上の人が避難し、いまも8万人近くの人が避難生活を送らざるをえないというのに、原発再稼働を進める日本政府の行動は、常軌を逸した狂気の沙汰としか思えません。

原発事故すらなかったことにされようとしている、避難者なんていなかったことにされようとしている、私たちは難民、いや棄民なんだ、そんな思いを強くしています。

避難をしたものの、福島から離れば離れるほど周りは他人事で、共通言語を探すこと、思いを伝えることが困難となります。そんな中、自らを押し殺して避難先に溶け込む努力が強いられます。結果として重苦しい鉛のような思いを、どんどん身体の奥深くに溜め込んでいく…そのような状態がつづいています。

東京電力が差し出した「賠償金」とは名ばかりの迷惑金みたいなもので、仮の避難先（福島→高知県）へ家財道具を移動させるための引っ越し運賃にも満たないものでした。十分な賠償もないまま、2度の避難（福島→高知→岡山）に、出費はかさみました。

福島で人脈や仕事上の関わりを広げながら、手すき和紙で独り立ちをしようとがんばっていた夫は、仕事と希望を失いました。それでも避難先で被災者対象の緊急雇用などで一時的な仕事をしたり、私が働き始めると主夫をしてくれました。そして今、ようやく自分の使命を見定め、農業研修の道へ入ったところです。

私は、家計を支えるため、訪問看護ステーションで働いています。慣れない土地で、家計を一手に引き受け、さまざまな不安とストレスに押し潰されそうになりながらも家事、育児、地域や学校の活動に追われる日々です。当たり前の生活を取り戻したい…この一心で、避難生活を乗り越えようと必死の思いでがんばっています。

当たり前の生活とは、どのようなものでしょうか。

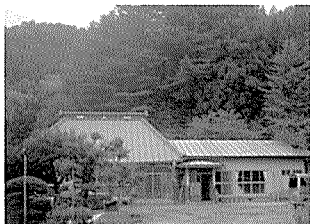
それは、避難先ですぐに始められるものではありませんでした。それは、自然災害だけではなく放射能汚染という人災、しかも数万年に及ぶといわれる先の見えない汚染、また、目に見えない奇怪な物質に囲まれて暮らさなければならないという、とてつもない不安から逃れるためにさまよい、たどり着いた場所です。それは、すべてを一瞬に断ち切れ、宙ぶらりんの状態で、傷ついた心のやり場もなく、どうにかたどり着いた場所なのです。

見わたすと 周囲の世界では、原発震災前と何も変わらぬような日常の風景が、これまでと同じように、「当たり前の生活」として営まれています。原発事故とは無関係のように暮らしている人々からは、「ここは大丈夫、地震なんて来ないから!」と、避難者への関心も皆無で危機感さえ感じられません。そのような人々に囲まれる日々の中で、避難の重荷を背負ったまま馴染まなければならない現実が心身に重くのしかかります。延々とつづくこの併存する2つの世界の狭間で、まるで見えない檻に入れられた状態で笑顔を浮かべているピエロのような心境にさえ思えてくるのです。暮らしの基盤がある地元の人たちとのさまざまな格差…分かり合う人間関係や土地勘の格差、日々の生活における経済的な格差、核家族ゆえの人手がなく時間の余裕がないゆとり格差、心にぽっかり空いた傷がふさがらない心の格差…そんなことを感じてしまう日常の中で、子どもの教育への影響や、自分たちの先行きへの不安は増すばかりです。

自らを無理やり納得させるのではなく、心にぽっかりと空いた傷口がゆっくりとふさがり、避難者としてではなく、その場所での、その住人であるという自覚がもてるようになる日が、すべての避難者に訪れることを、切実に願うばかりです。

2017年9月 はるえ

\*『まなぶ』（労働大学出版センター発行）725号より加筆、転載。



震災時の3月中に転入予定だった新天地、いわき市川前町小白井地区の家。大家さんも楽しみに私たち家族を受け入れようと引っ越しを心待ちにしてくれていましたが、叶いませんでした。私たちが西日本に避難したことで、大家さんや転校予定の小学校の先生方に心の傷を負わせたような気がして、痛切の思いです。